

千葉県北西部の日蓮宗系庚申塔



八千代市小池の庚申塚

2024. 4. 20

八千代市郷土歴史研究会4月例会

蔵 由美

釈迦如来像（日蓮宗系）庚申塔
延宝4年（1676）
船橋市大神保町路傍

はじめに

八千代市郷土歴史研究会では、一昨年からの市内北西部の佐山・真木野に続き、今年度は小池の調査を行っていますが、24基の庚申塔が並ぶ小池の庚申塔群は、貴重な史跡・歴史民俗遺産です。

特に重要な点は、①元禄5年（1692）から現代（2019年）まで327年間、連綿と途切れることなく続けて24基建立されていること、②優れた像容の青面金剛像塔が3基あること、③日蓮宗系庚申塔であること、④当群最古の元禄5年塔は千葉県内の日蓮宗系庚申塔の中でも青面金剛像塔として初発であること、などです。

この小池の庚申塔群の宗教的・歴史的・地理的な価値を把握、理解するため、千葉県内の庚申塔、特に日蓮宗系庚申塔に関する論説とデータを調べ、さらに市外に範囲を広げて、実地調査を試みています。

今回の学習会では、佐山・真木野・小池などの庚申塔群の背景を知る一助になればと思い、中間報告をさせていただきます。



明和2年（1765）八千代市小池

八千代市内の日蓮宗系庚申塔

☆市内の庚申塔数*は **432基** (*『市史』による昭和期までの数)

☆日蓮宗地域*の庚申塔数は、**118基*** (小池の平成期の4基含む)

*平戸・佐山・島田・島田台・小池・真木野・神久保

*116基の時代別の数

江戸前期	(1682～1710)	5基
中期	(1724～1800)	22基
後期	(1807～1863)	49基
近代	(1870～1934)	33基
現代	(1946～2019)	7基
不明		2基

☆うち日蓮宗系庚申塔*は、**64基**

*題目の「南無妙法蓮華経」・「妙法」、
「帝釈天王」、「釈提桓因天王」の銘を
もつ



佐山字新久の庚申塚

船橋市の日蓮宗系庚申塔

☆船橋市の庚申塔数*は **328基**

☆うち日蓮宗系庚申塔は、**61基**

- ・船橋市西部＝藤原・前貝塚町・旭町・馬込町に10基
- ・同北部（千部講のムラ）＝大神保・小野田・車方・小室・坪井に51基。
- ・同地域に一般の庚申塔が11基あり。

☆船橋市内総計 **72基**

（房総石造文化財研究会 大塚武彦氏の調査による）

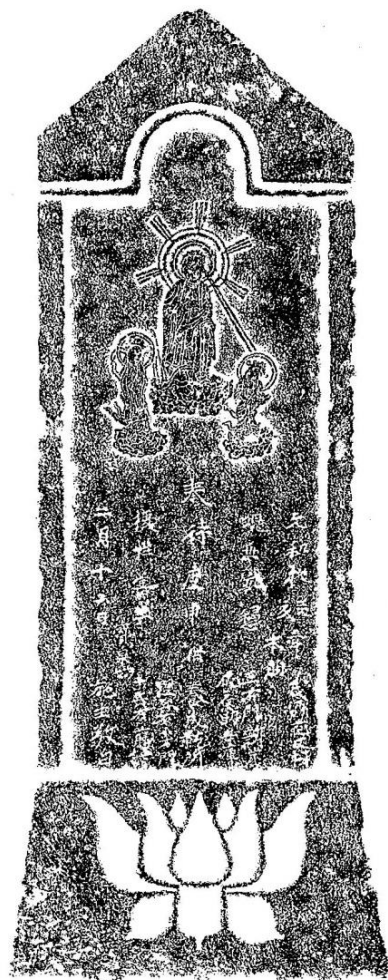


↑ 車方の庚申塚

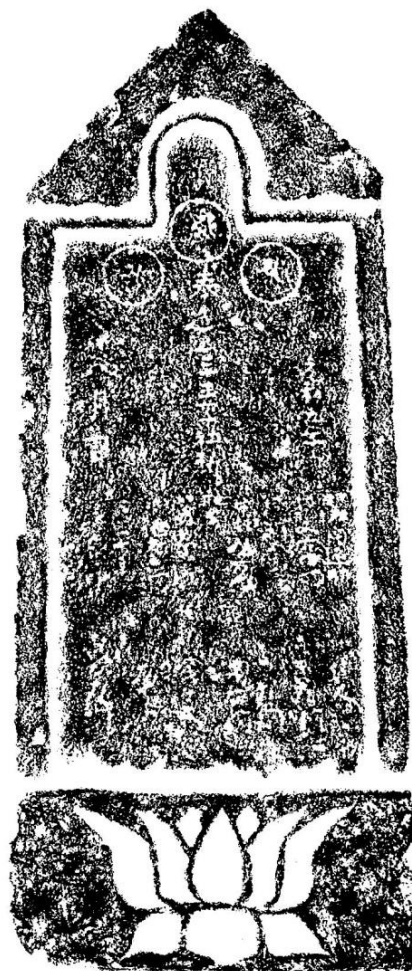


小野田の庚申塚→

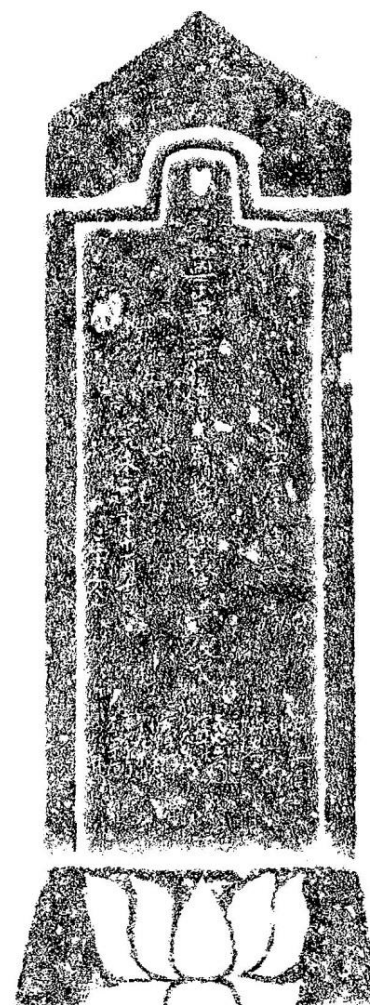
近世庚申塔の関東での初出



足立区正覚院
弥陀三尊来迎塔
元和9年（1623）



三郷市常楽寺
山王廿一社文字塔
元和9年（1623）



松戸市幸谷観音
山王廿一社文字塔
寛永2年（1625）

千葉県の新世初期庚申塔



正保3年（1646）浦安市大蓮寺



慶安3年（1650）松戸市古ヶ崎 圓勝寺
「奉造立庚申供養二世安樂所」銘



承応2年（1653）
富津市竹岡 松翁院

千葉県の新世初期の庚申塔-2



万治2年(1659)
我孫子市手賀高野山香取神社
「奉造立庚申講衆二世安楽所」 銘



万治3年(1660) 八千代市最古
八千代市高本八幡神社
「為庚申待現當二世悉地成就処」



寛文4年(1664) 船橋市最古
船橋市鈴見町墓地
(キリーク) 三猿

千葉県の日蓮宗系庚申塔-1



千葉県最古の日蓮宗系庚申塔

寛文以前の日蓮宗系庚申塔として、板碑型や笠付角柱型文字塔と、如来像や菩薩像の庚申塔が、貴重な事例として見られるが、その中でも近世初期庚申塔成立にかかわった重要な作例である。

近世初期の日蓮宗系庚申塔として、市川市・松戸市・流山市・船橋市に、明暦2年から延宝5年まで、6基の釈迦像塔がある。

また寛永年間に足立区内（正覚院）や松戸市内（福昌寺）などから発祥した近世庚申塔の、市川市での造立開始に当たっては、日蓮宗寺院が先導した可能性が高い。

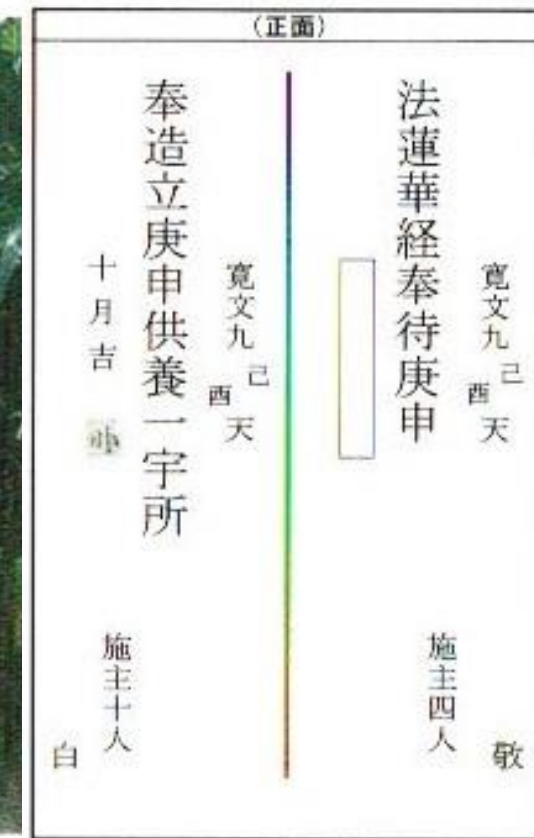
（山口薫子「近世庚申塔造立の様相」2005）

明暦2年（1656）
市川市曾谷安国寺
「妙法」「御庚申待」銘
合掌印釈迦如来像

千葉県の日蓮宗系庚申塔-2



寛文9年（1669）
市川市大野青松庵
「妙法奉帝釈待」銘
合掌印釈迦如来像



寛文9年（1669）
松戸市東平賀東雷神社
板碑型

千葉県の日蓮宗系庚申塔-3

船橋市最古の日蓮宗系庚申塔

延宝4年（1676）
船橋市大神保町 路傍
合掌印釈迦如来像
正面右の銘「妙法奉供養庚講為二世安楽也」



千葉県の近世初期の日蓮宗系庚申塔-4

平戸と島田の天和2年（1682）題目（法蓮華經）を刻んだ八千代市最古の日蓮宗系庚申塔
八千代市最古の庚申塔である吉橋の高本八幡社の万治3年（1660）銘の三面三猿塔の像容を継承している。



天和2年(1682)島田字通原
「南無妙法蓮華經法」銘



天和2年(1682)平戸字道地
「妙法蓮華經」銘

「釋提桓因天王」 銘庚申塔-1



藤原町七面堂の庚申塔群

中央は、元禄8年(1695)の三猿付庚申塔銘「奉信敬釋提桓因天」

左は、享保元年(1716)の青面金剛像庚申塔、右は安永7年(1778)「青面金剛」文字庚申塔

写真は、「船橋市デジタルミュージアム」から

「釋提桓因天王」 銘庚申塔-2



元文5年(1740)
船橋市小野田町
「南無釋提桓因天王」銘



寶曆14年(1764)
八千代市真木野
「南無釋提桓因天王」銘



明和2年(1765)
船橋市大神保路傍
「南無釋提桓因天王」銘



天明7年(1787)
八千代市小池
「奉勸請釋提桓因天王」銘

千葉県唯一の帝釈天像石塔



船橋市前貝塚町神明神社



元禄6年（1698）
船橋市前貝塚町神明神社
「南無帝釋天王」銘

（個人の信仰による帝釈天供養塔か、または、講による庚申塔か、意見が分かれる）

日蓮宗系の青面金剛像庚申塔-1



元禄 5 年（1692）八千代市小池庚申塚
「妙法蓮華經・・・」
千葉県最古の日蓮宗系の青面金剛像庚申塔



八千代市内最古の
青面金剛像塔
延宝2年（1674）
八千代消防署前
高津村建立の庚申塔



元禄6年（1693）
船橋市小野田 路傍
「庚申為二世安樂也
玉正院日明」銘

日蓮宗系の青面金剛像庚申塔-2



元禄11年（1698）
船橋市前貝塚町神明神社
「奉信教帝釋天王一結之衆中
願成辨」銘



元禄16年（1703）
八千代市島田字通原
「南無妙法蓮華經法」銘

日蓮宗系の青面金剛像庚申塔-3

画一的な特徴の青面金剛像庚申塔
(他に、松戸市上総内日枝神社寛延2年塔など)



寛延3年(1750)佐山庚申塚



寛延3年(1750)真木野庚申塚



宝暦9年(1759)小池庚申塚

江戸中期の画一的な青面金剛像庚申塔



延享3年(1746)吉橋尾崎字芝山の庚申塔



地域的な特徴のある類似彫像塔

下総地域では、青面金剛像塔が数的にも最盛期になる中期、個性的な彫像塔のほか、画一的な特徴の像容の庚申塔が多数みられるようになります。

主尊の目がアーモンド形で、右手に鈴状または人身の頭部らしき袋状のものをもち、宝輪を持つ手が直角で水平に伸び、迫力がない邪鬼がうづくまる姿の特徴は、印旛地区・印西地区から白井市や船橋市の東部、我孫子市・柏市・栄町に広がっています。

三猿も、両端横向きで中央が正面向きの形でよく類似し、配置される台座や塔身下部のスペースにより、一列の平型、または三角型に配置する特徴があります。

これらの特徴を大畠洋一氏が「生首持ち型青面金剛」と提起、さらに印旛・手賀沼周辺に限定してこの青面金剛像塔が118基、三猿文字塔が17基あり、時代も享保3年(1718)から宝暦12年(1762)の44年間に限定されることが、石田年子氏により報告されています。

日蓮宗系の青面金剛像庚申塔-4



宝暦2年（1752）
船橋市車方路傍



明和2年（1765）
八千代市小池
「妙法」 銘

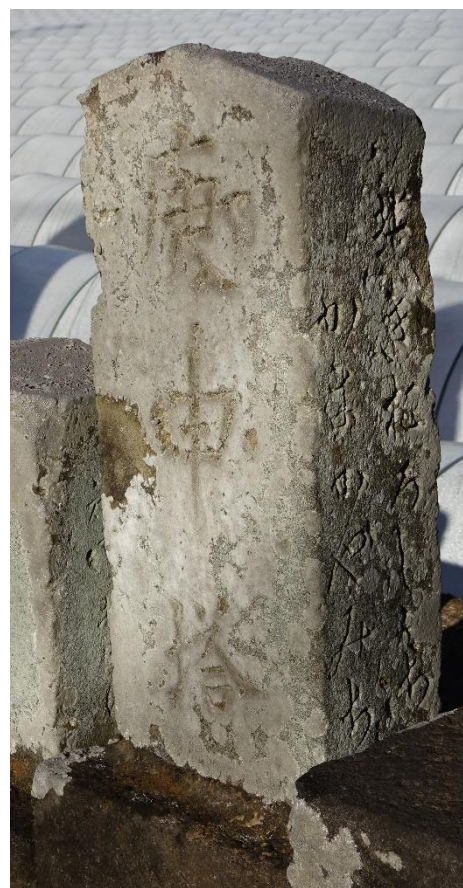
「庚申」銘の文字庚申塔



寛政14年 (1792)
船橋市車方路傍
「庚申供養塔」



文政2年 (1819)
八千代市真木野字台
「庚申塔」



天保5年 (183)
八千代市佐山字新久
「庚申塔」 (道標付)



平成3(1991)
小池字庚申裏

「帝釈天」銘の文字庚申塔



安永2年(1773)
船橋市小野田町
「奉信敬帝釈天王
守護之處」銘



寛政8年(1860)
八千代市小池字庚申裏
「大帝釈天王」



文政11年(1828)
船橋市小野田町
「帝釈天」銘



万延元年(1860)
八千代市真木野字台
「大帝釈天王」

題経寺式帝釈天像の庚申塔



嘉永5年（1852）
松戸市紙敷広隆寺
「病即消滅 不老不死 帝釈天王」銘

「帝釈天」の名が一般にひろく知られるようになったのは、安永7年（1778）の庚申の日に柴又の題経寺で「帝釈天」という像が刻まれた板本尊が発見され、その霊験が有名になってからといわれる。

この板本尊の像は、一般的な帝釈天像とは異なる特殊な像であるが、その画像は「高祖御真筆の板本尊」として刷られ、広く普及した。

題経寺式帝釈天像が刻まれた庚申塔は、松戸市紙敷の広隆寺の嘉永5年（1852）の像塔が県内では唯一で、他はすべて文字塔である。



柴又の題経寺の「帝釈天」像
（真木野の庚申講の掛軸から）

まとめ

- ・千葉県北西部における近世庚申塔は、千葉・埼玉・東京が境を接する江戸川流域の発祥地に近い松戸・市川市域で成立し、東へと広がっていったと推定できる。
- ・この地域は中世以来の有力な日蓮宗の古刹も多く、これらの寺院の影響下の村落から、題目銘や帝釈天銘の庚申塔が普及して、旧中山法華経寺領の船橋市・八千代市域に及び、近現代まで、数多くの日蓮宗系庚申塔が造立されていった。
- ・これらの地域の初期日蓮宗系庚申塔の形態は、明暦～天和（1656-83）期は、釈迦如来像に「妙法」などの題目を刻んだ笠付型、題目または「帝釈天（釋提桓因天）」銘三猿付板碑型・笠付型が主流であった。（一般の庚申塔も、諸如来・菩薩像塔、または三猿付板碑などである）
- ・当地域で一般の庚申塔に青面金剛像が現れるのは、延宝（1673～）期からである。日蓮宗系庚申塔はやや遅れて、八千代市小池の元禄5年（1692）から盛んに建立され、船橋市藤原町の安永7年（1778）まで続く。
- ・天明（1781～）期から、一般の青面金剛像塔が一斉に「青面金剛」銘、さらに「庚申（塔）」銘の文字塔へと変わっていき、日蓮宗系庚申塔も機を同じくして、「帝釈天（釋提桓因天）」、まれに「庚申（塔）」銘の文字塔に変わる。
- ・安永7年の庚申の日に、柴又の題経寺で「帝釈天」板本尊が発見され「帝釈天」ブームが興るが、像塔から文字塔へ変わっていく時代背景から、その題経寺式「帝釈天」像を刻んだ庚申塔は松戸市紙敷の嘉永5年塔のみである。なお、題経寺式以前の帝釈天像塔は、船橋市前貝塚町の元禄6年塔がある。
- ・江戸後期以降も船橋・八千代市域では庚申塔の造立が続けられ、現代に及ぶ。

ご清聴ありがとうございました